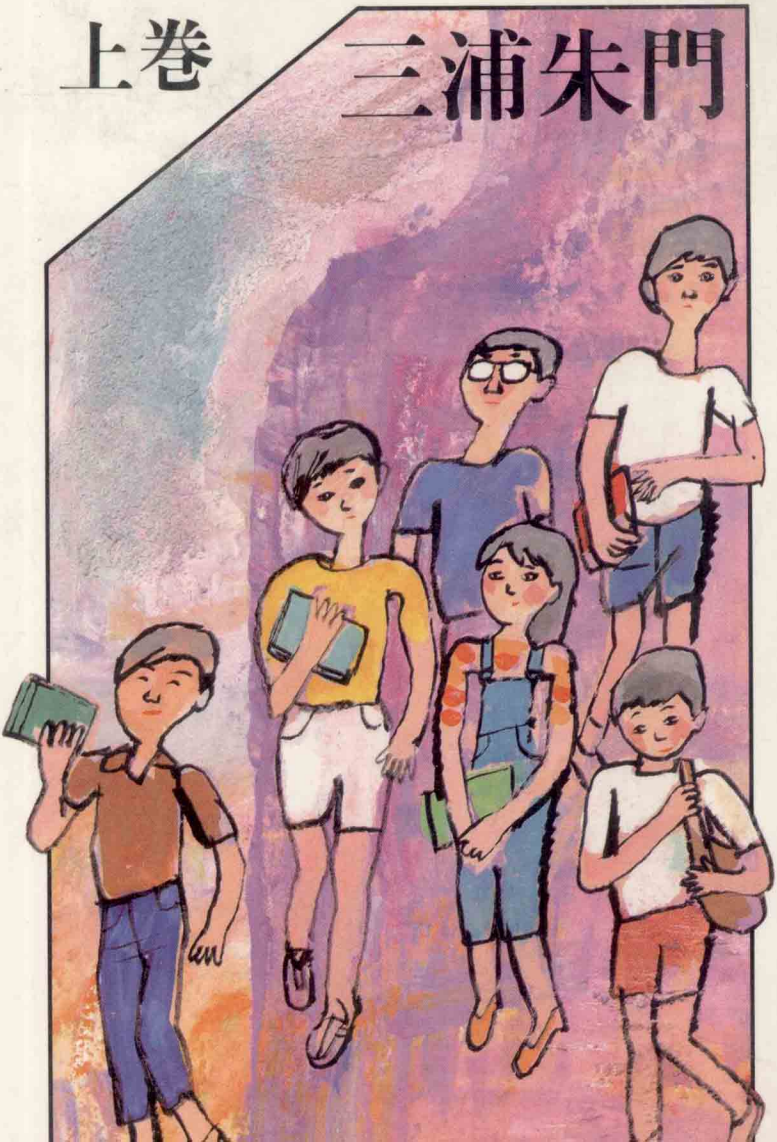
若葉学習塾

上巻

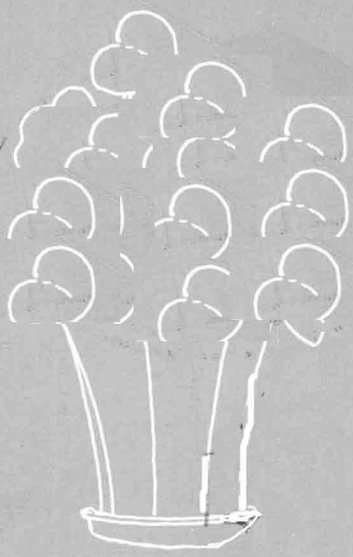
三浦朱門



石渠学習塾

上巻

三浦朱門



新潮社

若葉学習塾（わかばがくしゅうじゅく）　上巻

著　者　三浦朱門（みうらしゅもん）

昭和五十六年十月　十　日　発行

昭和五十七年三月十五日　二刷

発行者　佐藤亮一

印刷所　二光印刷株式会社　製本所　神田加藤製本

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電　話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定　価　九五〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Syumon Miura Printed in Japan. 1981

上巻／目次

家出娘　5
母性愛　36
御対面　72
いじめっ子　109
血を分けない兄弟　151
闇の中の手　193

〈下巻＊目次〉

闇の中の手（承前）
夏休み
乳離れ
春の目ざめ
暴力
あとがき

装幀＊太田大八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

若葉学習塾——上巻

家出娘

一

東京だって、マンションの十四階ともなれば、西の山に沈む夕日が見られる。

紫色の丹沢の山に雲がかかって、山なみの形がはっきりしない。しかし、日が沈むと同時に、それまでハレイションで見えなかった富士山のシルエットが浮かんできた。

ぼくは室内靴の爪先が富士山頂に重なるように脚をつき出しながら、

「女？　女は傭いたくないなあ。大体、子供も父兄も女の先生はいやがるもの」

新しいソファに背中をあずけてそんなことを言ってると、いっぱしの経営者みたいだ。事実、ぼくは若葉学習塾の塾長だから、経営者といえば経営者なのだが、三十になるかならないで、そして十年前はヘルメットにゲバ棒という大学解体の「兵士」だったことを思うと、偉そうなことを言ったついでに、

「へ、へ、へ」

と笑いだしてしまう。全く、どうしてこんなことになってしまったんだろう。あのころ、誰も彼もヘルをかぶってはいたけれど、大学紛争がおちつき、四年になると、ヘアスタイルは長髪ながら、床屋できれいに刈りこんでもらって、鬚をそって、さっさと就職するヤツばかりだった。

その連中、今どろやっと仕事になれたころで、経営者にしてみれば使いごろ、という訳だ。当人は仕事に手を抜くことを覚えて退屈だもんだから、女房を見つける。子供がうまれる。しかし、いずれ、せま苦しい社宅住いだ。

それなのに、ぼくの方は、そんな生活をあきらめて、就職に目の色をかえていた連中に背を向けたつもりなのに、かなり高級なマンションに住むことになってしまった。どこかで狂ってしまったのだ。しかし、加代子はぼくがそんなことで考えこむことを許しはしない。彼女はぼくより四つも年上だし、実務家なのだ。

加代子はぼくの爪先を帳簿の角でたたいて床におろさせる。真面目に考えて頂戴、ということなのだ。五年前だったら、接吻してやれば、彼女だって、そんな面倒な話をすぐ忘れてくれた。三年前でも、スカートの下に手をいれた

ら、帳簿などぼうり出して、
「バカねえ」
と言っただろう。今では、スカートをめくりあげても、照れるどころか、靴下のCFみたいに脚を動かしてみせながら、
「こんな美的でもないアンヨに、いつまでだまされてくれるかしら」
と白けきった顔で言って、ぼくの戦意を喪失させておいて、
「で、今の話だけれど……」
と帳簿を拡げるだけだろう。ぼくもそういう経過が読めるだけ大人になったから、スカートをめくる、などという下らないことはやめて、
「何故、女の教師がいるのさ」
と相手になってやった。
「五年の自由クラスだけれど、五年じゃおそいのよね、で、四年の自由クラスを作ろうと思うの。そしたら、面倒見のいい人がいいでしょう。やはり女よ」
自由クラスというのは、進度のおくれた生徒の組で、その名の通り、自由に二年、三年の時に学習したはずのことにまで戻ってやりなおす。このクラスでは算数で言うと、掛算の九々、国語なら初歩的な漢字の書き取りは重要な勉強になる。
それよりもっと「できる」子は、補習クラスである。これはちょっと手伝ってやれば、前に習ったことを思いだして、今の授業についてゆける。一番学力のある級は専門クラスといって、これは入試用その他の難しい問題を中心に教えている。
自由クラスの生徒は大雑把に分けて、二つのタイプがある。できないと思って萎縮してうつむいている子。教師の説明が終ると、ニコニコしてうなずくが、実は何もわかっていない子。
確かに五年の自由クラスというのは遅すぎる。四年からやらないとダメなのかもしれない。
どこの小学校でも、一二年はベテランが受け持つ。子供を学校生活に引きこむにはかなりの技術と努力がいる。五六年生は進学その他で、またそれなりの能力を教師に要求する。三四年は中だるみというか、安易にやれば、いくらでもレベルをおとせるので、お産前後の女子教員とか、組合の仕事でいそがしいとか、ノイローゼになっている人とかが、まともな先生にまじって、この学年を担当する。
それでも能力があり、家庭が教育熱心なら、担任の教師のレベルなど、あまり問題にならない。能力が低く、というより、家庭の教育環境の悪い児童が三四年の時に、この

種のハズレ教師の手にかかると、ガクンと学力が落ちてしまい、五六年になった時に、ついてゆけない、といったことになりがちなのである。

二

「そんなこと言ってないで、会ってみたら？　美人よ」

加代子はなおも追及する。ぼくは、美人よ、という一言に心が動いたが、あえて黙殺する。今のように二人が夫婦も同然になってからだって、彼女は何度か自分は年上なのだからと、身を引く素振りをした。しかし絶対にそれに乗ってはならないのだった。

世間的には二人の間がアパートの持主と間借人という関係であった状態が数年間続いた。そのころアパートの近くに喫茶店があった。ウエイトレスが一人の店だった。

「あのコがね、あたしに聞くのよ、お宅のアパートにいる若い人、どういう人って。だからね、あの人はね、東大出の革命家よ、と言ったら、もうね、スターにあこがれるファンみたいな目付になったわよ。デイトに誘ってやったら？」

その時、ぼくがよほどだらしのない顔をしたのだろう。

「コイツメ」

突然、本がとんできて、眼鏡をはじきとばした。痛くはなかったが、驚いた。体を横にして、眼鏡を取ろうとしたら、加代子はもう馬乗りになって、ぼくの髪の毛をつかんだ。灰皿を片手で振りあげている。

「抵抗するか？」

「抵抗しない。だけど無茶だよ、あのコを誘うとも何とも言ってやしないじゃないか」

「嘘言ったって、顔見りゃわかるんだから。これで、いつでももぐりこめる、女付きのベッドがもう一つふえたって顔だったわ」

「そんなことないよ」

「大体、一緒にあの店にいる時、あたしにヘコヘコするからいけないのよ。だから、ただの間借人と思われちゃうのよ。男だから、もっと、傲然としてなくちゃ。おごってもらってすいません、という顔じゃなくて、おい、払っとけ、という態度をしてくれなくちゃ。だから、あのコみたいに、あなたのことを、根掘り葉掘り聞いて、紹介してくれ、なんてあつかましいこと頼むのよ」

「傲然としろったって、馬乗りになられて、髪の毛つかまれて、灰皿でなぐられようとしてるんだぜ、傲然としようにもできる訳がない。フン、何が革命家だ」

加代子はやっと馬乗りになるのをやめて、眼鏡を拾って

くれた。
「革命家というのはね、彼女をおどかして諦らめさせるつもりで言ったのよ。それなのにうっとりした目なんかして……」
ぼくが加代子と最初に会ったのは、占拠した校舎のバリケードの中だった。ぼくは汗と垢とのにおいのしみた、誰の物とも知れぬ寝袋の中にいた。夜だったが電燈はない。加代子は週刊ジャーナルという週刊誌の臨時傭いで、リーダーにインタビューしていた。ぼくはシュラーフの中でそれを聞き、彼女がメモを照らすフラッシュライトの反映で彼女の顔を見ていた。いい女だと思った。まあ、いくらか魅力のある女記者でもなければ、彼女が働いていた反動的な週刊誌など、バリの前で追い返されたであろう。
初対面といっても、ぼくが彼女を知っているだけで、彼女はぼくを知ってはいない。ぼくは大学二年だったし、雑兵にすぎなかった。昼間になると、校舎の前に連れ出されて、リーダーの笛の合図でゲバ棒を持って突撃したり、銃剣術みたいに、ヤ、ヤーと突くマネをしていたのだから。
とにかく、加代子が美人よ、と言って推薦する娘に、それじゃ、などと会う気になったら大変なことになる。やはり、ここは、もう一度はしぶるテである。
「何だって、また女なんか傭いたいんだ」
「彼女に週三日、事務をやってもらうの。授業は事務を閉めてから」
午後の授業は四時十分から六時までで終る。事務は六時十五分に閉めるが、同時に、夜のクラス——社会と理科だけの——が始まる。加代子は新しく女教師を傭って、六時十五分から、四年生用の自由クラスをはじめると言うのだ。一つのクラスは週三日だから、彼女の出校日も週三日。出校日には四時にはじまる事務もさせようという考えなのである。
「あたしも休みたいのよ。今日は日曜だからいいけど週六日出づっぱりでしょ。今度マンションに入ったからは、いくらか、生活を楽しみたい。あなたと一緒にお芝居見に行ったり。今日みたいに日の沈むのを見ながらお酒飲んだり……」
ぼくは確かに二三年前から、子供の相談相手、父兄の教育・進学相談の専門になっているから、大体は塾に出てはいるが、父兄に会う約束もなく、気が進まなければ、塾に行かない日もある。そのかわり、ぼくは無給だ。もっとも衣食住から小遣まで、加代子が面倒みてくれているのだから、タダ働きとは言えないけれども。これはぼくが加代子の居候だった時代の名残りなのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

三

もうすっかり日が落ちて、富士山の輪郭も闇に沈んだ。そして星が出る。こうして見ると東京の空気が濁っているというのは、ほんの地上十何メートルの間のことなのだろうか。加代子がフロアスタンドをつけると、大きなガラス窓に、室内が映る。戸外のネオンや電燈が、ガラスに映った室内の空間に、妖精の火がとんでいるかのように浮かんでいる。

「飲む?」

加代子がブランデーのタンブラーをわたしてくれる。

「で、そのコ、事務もやってくれるって?」

「そう。何でもお見合いして、九分九厘きまった相手がどうしてもいやでとび出してきたんですって。何としても自活するお金がいりますって言うの。でも本当に美人だから。彼女が事務をしてると、十分の休み時間が終っても、先生たちなかなか教室に戻らないかもね」

また、美人と言う。念には念をいれて、ぼくの気が動いたのは、そのためではないかとさぐっているのだ。

「美人、美人て、どんなコ?」

こうなったら、聞こえないふりをするより開きなおった方がいいのだ。

「長い黒い髪をしていてね。ネービーブルーの巻きスカートを赤く縁取りして、金の大きなピンでとめて。セーターが真赤なの。紺のエナメルの靴をはいて、やはり紺エナメルのバッグ持って。どう、ステキでしょう」

「ステキよりも何よりも、どこの大学の何科を出たの?」

「日本女子大の何科と言ったかな、とにかくね、一応、小学校の先生の資格あるのよ」

「フーン、じゃ、おれよりましだ。おれ、大学の教師しかできないもんね」

世間の人は知らない人が多いのだが、教職免許で一番面倒、というより、特別のコースを履修しないと取れないのは、小学校教員のそれである。中高校教員免許の場合は教育の単位をある程度そろえれば、出た学部によって科目は違っても、大学を出れば何かの免許はくれる。何もいらないのは大学の教員である。教授会が認めれば、義務教育をすましていなくとも教授になれる。ぼくは教育の単位なんか、面倒くさくて取らなかったから、小学校は勿論、中学、高校の教員にもなれない。可能性があるのは大学だけ、ただし、どこかの大学の、どこかの学部教授会が、ぼくの任用を議決してくれれば、の話である。

「働かなくちゃならない、というのと、小学校の教員の資

格がある、というのはいいな。じゃ、会ってみるか」
加代子がちょっと時計をのぞいた。
「あと二十分すると来ることになってるの。一階にコルセッティというイタリー料理屋があるでしょう。あそこから、三人前の出前頼んであるの。彼女と三人で食事をしながら相談してよ」
何のことはない。加代子はもう全部お膳立てをしてあったのだ。美人だという言葉に釣られて、会うなどと言えば、えらいことになる、などというのは、一人相撲だった訳だ。
ぼくは塾長ということなのだが、結局、何から何まで加代子にあやつられている。つまり、ぼくは塾長という名のサルで、加代子はサル廻しだ。今さら反対しても仕方がないが、やはり男として、彼女にいいように引き廻されたのは面白くない。
「誰の紹介なんだい」
「あたしから頼んだの、セガワさんに。知ってるでしょ、セガワさん」
ぼくは心当りはなかったが、あいまいにうなずいた。多分、加代子のジャーナリスト時代の知人だ。知らないなどといって、説明されて会っていたことがわかったりすると、またトッチメられるから、ぼくはうなずいた。
加代子は上機嫌で、ぼくのタンブラーにブランデーを足して、ついでに、チョコレートの箱を持ってきて、
「上らない？」
と言う。確かに彼女はぼくを男として、夫として、塾長として立ててはいる。しかしぼくは、彼女の意にそむいては、何事もできないのである。
「あ、何て名前、その人」
「アカシ、明るい石と書くのね。それから、あなたと似た名前。ハルコさん。ハルは春夏秋冬の春。あなたは明治の治のハルでしょう。上條治夫、でも、治夫と春子じゃ、何だか近親相姦みたい。でも、上條っていい姓よ。あたしの渡辺なんかより、ありふれていないだけでもいいわ」
入口のチャイムが鳴った。
「あら、もう。早いみたい。それともコルセッティの出前かしら」
加代子が入口に出てゆくと、間もなく、華やかな女の声がした。塾長としても、加代子のつれあいとしても、ここは軽々しく出迎えに出てはならないのである。ムリして外を見ていると窓のガラスにスラリとした女の姿が映った。
「あなた、今お話してた明石春子さん」
「やあ、どうも」
加代子はネービーブルーのスカートに赤いセーターと言ったが、見ると赤いスカートにネービーブルーのセーター

である。
「赤いセーターと紺のスカートをお召しとうかがいましたが」
「色変りの同じデザインのを持ってますの」
娘はさもおかしそうに笑った。

四

春子はよく食べた。出前のハムとメロンをあっという間に平らげたあとを、赤ブドウ酒で喉をうるおして、
「あたし、アサリのこれ一番好きなんです」
と言いながら、スパゲッティをフォークに巻きつけて、皿をきれいにしてしまった。そして骨の髄の料理をつけあわせの野菜と一緒に片付けた。ぼくは食べながら話をしようとしていたのに、彼女の食べるスピードにのまれて、ろくな話もできなかった。
それに女のくせによく飲む。ちょい、ちょいと口をしめしているように見えて、グラスはすぐに空になる。でも、さすがに目許がほんのり赤くなった。唇の色もルージュの色に深みがました感じになる。
「もっと、何か上りますか」
と加代子が言った時は、
「いえ、もう充分いただきました」
と言ったくせに、アップルパイの、かなり大きく切ったのを出すと、これもたちまち消えてしまった。そこで大きく肩で息をして、
「ああ、おいしかった。初めて上るお宅でこんなにいただくなんて、恥ずかしいんですけれど、今朝、家を出てから、お金を節約しようと思って、お昼、立ち食いのうどんだけだったの」
家出なら、ぼくも思い出がある。大学の卒業式に行くと家を出たっきり、もう八年も帰らない。まともな就職をしないといって、毎日オヤジとは言い争っていたし、オフクロはぼくの顔を見るだけで涙ぐむくらいになっていた。
大学まで行く途中の電車の中で、つい目頭が熱くなったっけ。兄二人が秀才とはいえなかったから、ぼくだけは後を継いで役人になってくれるものと、オヤジはぼくに期待した。それを裏切るのはつらかったから、なる気なんかなかったけれど、とにかく東大の法科は出てやったんだ。
その日、家を出たら、もう二度と帰らない。大学を出たら、もうキャンパスに行くこともない。やはり心細かったし、両親にすまないと思った。だから、本郷の郵便局から卒業免状をオヤジあてに送った。
「おかげさまで、無事、大学を卒業しました。いや味でも

なんでもなく、うまれてからの二十二年間のすべてを、心から感謝しています。今日からは一人で生きて行きます。治夫」

と書いた紙をいれた。郵便局を出た時は、こらえ切れずに涙が溢れた。三四郎池のほとりで、三十分も泣いたかな。なんていったって、あのころのぼくはネンネエだったんだ。ほんと、高校の二年、三年は、テレビも映画も見なかったし、参考書以外の本は読まなかったもの。ぼくの頭で現役で文一にはいるには、そのくらいやらなくちゃダメだったんだ。

ぼくは自分の思い出にひたりながら、春子になるべく意地悪な質問をしようと思った。

「女の子の家出というと、大概、男の子がいるもんだけど……」

「それがサッパリなんです」

春子はむしろ楽しそうにそう言った。

「あたしだって、学校出たら働きたかったんです。そしたら伯父に弁護士をしているのがいまして、その秘書なら、といわれました。夢がありませんもの。それで家にいたら、縁談、お見合いでしょう。もうどうでもいいや、と思って、九月にお見合いした人にウンと言いました。そして、お結納が来てから、急に不安になっちゃって。製鉄会社の社員の奥さんになって、工場のある地方に行ったり、東京に転勤したり……。つまり、奥さんてのは、まあ、秘書みたいで、大変て言えば大変ですけど、人生、亭主次第というか、亭主を通してしか世の中にふれないんです。イスラムのハーレムの女とそう変んないんじゃないでしょうか。それでも彼に夢中ならともかく、あの大学出て、その会社に入って、家がこれこれなら、あたしにはすぎた縁だ、というだけで、別に好きでもない人と結婚するなんて。好きって言うんなら、家にくる植木屋の職人さんの方がずっと好きでしたわ」

「へえ、そんな人いたの！」

春子は酔って、口が軽くなっていたのだろう。垂れ下がる髪の房をなであげながら――どうやら、それは彼女の照れている時のしぐさらしかった――むしろ挑戦するように言った。

「ええ、中学出ただけだけど、いい人でした。失礼なことしなかったし、紳士でした。大学におくれそうになって走ってたら、『明石さんのお嬢さん、乗ってけよ』って、仕事用のトラックで駅までとばしてくれたわ。きっとお得意さんに行くのがおくれたと思う。浅草の植木市も、おトリさまも連れてってくれたし、恋人じゃないけど、すごく気が合ったの。だけど、母がつきあっちゃいけないって、植

木屋さんまで別の所に変えちゃったんです」
「そうなんだな。ぼくのオヤジも天下の秀才のなれの果てでね。役所やめて、外郭団体の理事長してるんだけれど、あくせく勉強して働いて、その終着駅というのが、能力も大していらない、役所のくれる仕事を型通りやるだけ、バカでもチョンでもやれるポストかと思うと、ぼくもむなしくなったんだ」
「あたしも、結婚やめると言いだしたら、今さらお結納をつっかえせませんと言うから、思い切って、とび出してきたの」

五

「どう、あなた」
食卓の後片付けに台所に入っていて、リンゴをむいて持ってきた加代子が言った。ムダなおしゃべりなどしないで、塾の教員として採用するかどうかの答えを出せと言うのだ。
ぼくは、一応、型通り、彼女に果してやる気があるかどうか、小学校中学年の子供の心理について、どの程度の理解や関心があるか、たずねてみた。でも、もう採用することに心の中ではきめていた。美人というより、スタイルがよかったし、服装のセンスがよかった。顔立ちは可もなく不可もないといった所だったが、浅黒い顔は表情が豊かで、殊に大きな黒い瞳が話に熱中するとキラキラ光るのと、額の生え際の、うぶ毛の延びたような短かい毛が子供みたいで可愛かった。
「ねえ、あなた、家出してきたお嬢さんを追い払ったりすると、あなたみたいな仕事しかないでしょう、可哀そうよ」
あなたみたいな仕事というのは、キャバレーのボーイのことだ。女だから、生活に困ればピンクサロンのホステスなどになるのは目に見えているし、それは気の毒だと言うのだ。
「うん。じゃ、君と事務を分担するということで、お願いするか」
「待遇は、部屋と、光熱費と朝食つきで、ほかに月給で八万円」
「有難うございます」
春子は立って、ペコリとお辞儀をした。
「で、あなた、今晩、泊る所あるの？」
「ないんです。トランクを駅の一時預けにしといたんですけれど、今は、下の管理人のおじさんに頼んでおかせてもらってます」
加代子はその言葉を予期していたのか、命令するように言いかえした。

「じゃ、ここに今夜はお泊んなさい。明日、あなたの部屋に案内しますから。部屋というのは、つまりうちの塾はね、一階が教室で、二階が先生の寝泊りしている部屋なの。朝食つき、というのは、朝、一時間、授業といっても、宿題の世話とか、前に教えたことの復習のようなものを先生と生徒が話しあいながら、御飯をお味噌汁と、干物か何かで一緒にいただくの」

「おいしそう」

春子は目を輝かせた。よほど食いしんぼうの娘らしい。

「お風呂はないけどね、シャワールームはあるの。安い夜間電力を利用してお湯が出るのが。それも自由にお使いになって。じゃ、あなた明石さんのトランクを、運んでさしあげて」

どうしても、いざとなると加代子は塾長であるぼくに指図する形になってしまうのである。

春子と一緒にエレベーターで下におりながら、

「今日、家を出る決心がついたきっかけは？」

とたずねてみた。

「あの、週刊ジャーナルのセガワさんという人を、あの社に入っている先輩に紹介してもらって、ルポライターの助手のような仕事はないかって、きいたんです」

週刊ジャーナルというのは、加代子が昔、バイトで勤めていた所である。当時、彼女のボスだったセガワという男が、今は編集長とか次長、ということなのであろう。そう言えば、どこかのレストランか何かで会って引きあわされたような気がする。

「そしたら、セガワさんが、今の所、ルポライターの助手はいらない。だけど、昔ここで働いていた人のやっている学習塾がある。そこで、事務員を探している。経理の経験があって、結婚で仕事をやめた家庭婦人あたりで、パートでやってくれる人でもいたら、という話だったの」

春子のトランクは、海外旅行にでも行くような大型トランクが二つで、これがまた、すごく重い。

「こりゃ、大変だ。どうやって持ち出した」

「お友達の所に、すこしずつ運んで、そこで荷造りしたのよ」

「中身は？　税関の検査みたいだけど」

「衣類です。そう、考えてみたら衣類だけ」

春子はちょっと顔を赤くした。

「こんな重くてエレベーター、大丈夫かな」

と言いながら、ぼくはやっとのことで、トランクを運びこんだ。箱が動きはじめると、春子は先程の話を続けた。

「それで、昨日、渋谷の喫茶店で奥さまにお目にかかって、お願いしたの。経理なんて経験ないけど、一生懸命やりま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.